

5) 尿崩症の治療に関する2, 3の考察

山本洋三, °吉松 彰

最近10年間の当教室の尿崩症は7例で、その内訳は器質性尿崩症と思われるもの1例、特発性尿症と思われるもの6例、腎性尿崩症はなく、全例がアトニンに反応した。

その治療法を比較すると、下垂体埋没療法は一応成功したが局所反応で埋没物を排出し元へ戻つた。文献によつても効果は一時的であると報告されている。アトニン・バゾプレシン・ピトレシンは効果持続時間が数時間である。ポステリン・リノクリームは継続使用は1例では成功して居るが、不快感が強く又鼻炎を起し吸収されなくなる。油性タンニン酸・ピトレシンは経験例では1回注射の効果が最高8日間で、副作用はなかつた。現在の処、本症の治療法の中では、比較的優れている。

6) ネフローゼ症候群の Chlorothiazide 投与例

石神一良, °上原すず子

ネフローゼ症候群の浮腫治療に Chlorothiazide を応用した。3才男児例には250mgを用い、当日より著明な利尿と浮腫・腹水消失による体重減少を見た。同時にNa, K, Clの尿中排泄増量を認めNa, Clは略々同率であつた。11才女児例は500~1000mgで効なく一旦中止後1000mgとしPredonisolon 40mgと併用して始めて一過性の利尿と体重激減を見た。両例共血清電解質の減量特に低K血症には注意するべきで、EKGに於て前者ではQT時間延長、後者ではTの平低化並にU波の出現を見た。血圧は前者に著変なく、後者は軽度低下傾向にあつた。N. P. N.の上昇は見られなかつた。本剤は蛋白尿には効なく根本的治療剤とは考え難いが、本症例は何れも、Steroid Hormon投与中高度の白血球増多を併い抗生物質併用にも拘らず感染を反復、為に症状も増悪していた者で、かかる場合に本剤を試み浮腫の軽減を期する事は望ましいと思われる。

6への追加 有吉 徹(長野市)

ネフローゼ症候群の Chlorothiazide 使用例の第2例に於ける血圧の変動は如何?

私の経験するネフローゼ患児に於てもACTH-Zとクロトライドを併用し、浮腫の消失が一時顕著であつたが血圧の変動が非常に少い様に思われた1例をみた。

7) ネフローゼ症候群に於ける養素代謝に就て

山本洋三, 西宮芳之助
°石神一良, 布川武男

ネフローゼ症候群患者7名に計20回、N, 脂肪, Na, K, Cl, Ca, Pの出納を試べた。この中N, 脂肪, Na, Kに就き報告した。

1. N摂取は浮腫期には極めて低く、高蛋白食実施は困難であつた。プレドニソロンを投与すると、未だ利尿その他症状の改善をみない中から食慾はまし、N摂取も大となつた。

2. 蛋白尿大なる場合は非蛋白Nの尿中排泄は少く、蛋白尿大なる時に反つてN蓄積は高率であつた。

3. 脂肪の吸収は概して良好であつたが、浮腫高度な1例では低かつた。

4. 浮腫期にはNa蓄積は正、K蓄積は負となつたが、両者の絶対値は近似的に等量(Equivalent)であつた。

5. 緩解期にはNa, K共負の蓄積を示すもの多く、利尿後血清Kは低下の傾向を有した。

8) C reactive protein の補助診断的応用

中島博徳, 福本泰彦,
°新美仁男

CRPは、正常血清中には殆んど存在せず、炎症や組織破壊などのある患者血清中に非特異的に出現し、急性期反応物質の一種と考えられている。若しCRP Testが、陽性であれば、何んらかの異常の存在が疑われる。そこで如何なる疾患の際に、CRP Testが、陽性を示すか、又症状の変化に伴つてCRP Testが如何に変動するかを観察した。その結果、炎症性疾患は、非炎症性疾患に比し陽性率が高く、ウイルス感染症は、細菌感染症より陽性率が低い。アレルギー疾患は、大体陰性である。悪性腫瘍は、陽性のことが多い。内分泌疾患では、殆んど陰性。腎疾患では、陰性が多い。生後2週から4週の前感染未熟児では、常に陰性であつた。補助的診断に意義があると考えられた。

9) INAH 血中濃度と年令的差異

福本泰彦

Kelly-Poet法の田山、佐藤氏変法を用い、INAH径口投与後の血中濃度及び尿中排泄量の推移を観察した。尚投与量との関係、蓄積作用の有無、髄液中出現の時間及び量的関係に就いて観察した。蓄積作